資料 1-1
2020 年度 1 月 22 日

令和 2 年度の山部会の活動進捗報告

1. 山部会の目標とテーマ

山部会で抽出された課題、活動テーマ、今年度の活動目標を以下に示す。

課題	活動テーマ	今年度の活動目標
①人と地域の問題	流域圏担い手づくり事例集	○持続可能な地域づくりにつながる活動を行っている団体に取材を行い、「流域圏担い手づくり事例集Ⅲ」を刊行する。 ○川部会、海部会を巻き込んだ流域全体の担い手を発掘する活動とする。 ○これまでの事例集づくりで得られた情報と、取材先団体のカテゴリーや団体間の関係を整理し、現段階での事例集づくりの成果をまとめ、流域圏懇談会 10 年誌に掲載する。 ○事例集の活用方法と、今後の事例集づくりの方向性について検討する。
	山村ミーティング	○矢作川流域林業担い手 100 人ヒアリングの結果をふまえ、林業技術者と市民の協働による「流域の森づくりガイドライン」を策定する（森づくりガイドラインとの共同作業を想定する）。 ○ガイドラインの作成においては、林業技術者に直接意見をうかがうなど、懇談会との連携を強化する（担い手の創出）。 ○矢作川感謝祭への森林組合員の参加が定着してきたため、このイベントをどのように活用するか、さらに検討を行っていく。
②森の問題	森づくりガイドライン	○矢作川流域の森を守っているプロたちが、その仕事の意味や重要性を理解し、誇りをもって作業を行うための指針となり、同時に、矢作川流域の恵みで生きる河川管理者、沿岸漁業者、流域住民が、流域の森を守っているプロたちの作業の公益的な重要性を理解し、彼らをリスペクトし、応援するための指針となることを目的とした「森づくりガイドライン」づくりに取り組む。（②山村ミーティングとの共同作業を想定する） ○森林経営管理法、森林環境譲与税などの国の新たな動きを踏まえつつ、流域市町村の森林施策の着実な進行を後方支援し、流域圏全体として調和のとれた森づくりを目指す。 ○水循環基本法に定められた森林の雨水浸透能力又は水源涵養能力の整備について、矢作川流域における関係省庁や地方自治体の施策をフォローアップする。
	木づかいガイドライン	○矢作川流域内の各関係者が取り組まれている木づかい活動や推進テーマを「さあ～しよう」の形で提案していただくことにより情報を共有化し、流域内の身近な木を利用した木づかいが推進されるように「木づかいガイドライン」を作成する。 ○矢作川の流れを絆として、個人の思い入れを込めて流域が一体となることの大切さを伝えるアイテム「矢作川流域ものさし・私の流域物語」を有志で製作し、これを全国の各流域に配布することによって全国の各流域においてその理念と製作方法を普及する。 ○「矢作川流域ものさし・私の流域物語」の理念とは、「流域はひとつ運命共同体」・「水を使うものは自ら水をつくるべし」といった全国にも通用する矢作川の流域思想であり、こうした思想と共にある矢作川流域圏懇談会の取り組みについて全国の流域関係者に向けて発信する。 ○「私の流域物語」に記載された物語に関わる場所での「木づかいライブ・スギダラキャラバン(木育キャラバン)」の実施や、個人の思い入れを尊重した木づかいによる市民創造型・労働参加型・課題解決型プロジェクトを実施する。 ○こうした取り組みを通して矢作川の流域材を活用した楽しい「木のある暮らし」を定着させ「木づかいによる場所の力づくり＝プレイスメイキング」によって身近な生活空間を魅力的な地域空間に変革していく。 ○こうしたプレイスメイキングに際し、地域住民や地域の子どもたちが一緒になって活動することにより、特に子供たちに対して、地域資源と共に生きていく様々な原体験の場を提供していく。

2. 今年度の活動実績

今年度の山部会WG活動実績を以下に示す。

活動内容	日時	場所	活動内容
第 55 回WG（岡崎） 32 名参加（内オンライン参加 4 名）	7 月 3 日（金） 13:30～17：10	岡崎市額田センター 「こもれびかん」	・今年度の活動方針を確認、活動内容の話し合い。 ・4 つのテーマの進捗報告と意見交換
第 56 回WG（根羽） 20 名参加（内オンライン参加 5 名）	8 月 28 日（金） 14:00～17:30	根羽村老人福祉センター 「しゃくなげ」	・4 つのテーマの進捗報告と意見交換
第 57 回WG（恵那） 17 名参加	10 月 23 日（金） 13:30～17：00	恵那市上矢作振興事務所 講堂	・4 つのテーマの進捗報告と意見交換 ・森林環境譲与税を使った森林整備の事例について
第 58 回WG（豊田） 18 名参加	12 月 4 日（金） 13:30～17：00	豊田市崇化館交流 3 階　第 1 研修室	・4 つのテーマの進捗報告と意見交換
第 12 回「まとめの会」（岡崎） 21 名参加	1 月 22 日（金） 14：00～16：30	Web 会議	・今年度のWGのふりかえりについて ・次年度に向けた目標設定について

※参加人数は事務局含む

フィールドワークの活動実績を以下に示す。

活動内容	日時	場所	活動内容
ＦＷ（根羽） 12 名参加	8 月 29 日（土） 9:30～12：00	①山地酪農実験地 ②小栃私有林植栽地 ③万場瀬集落周辺森林 ④ハナモモ植栽地	・木づかい活動の現場を視察 ・地元産材の活用、森林の保全や育成について学習
ＦＷ（恵那） 15 名参加	10 月 24 日（土） 9:30～12:00	①奥矢作森林塾 ②串原大野地区	・森林整備・管理、地域循環利用について学習
ＦＷ（豊田） 16 名参加	12 月 5 日（土） 10:00～12：00	①豊田市 ・とよしば ・駅前通り ・矢作川（白浜公園・豊田大橋）	・豊田市の木質化への取り組みについて学習 ・矢作川水辺プロジェクトで整備された河川環境を視察

※参加人数は事務局含む

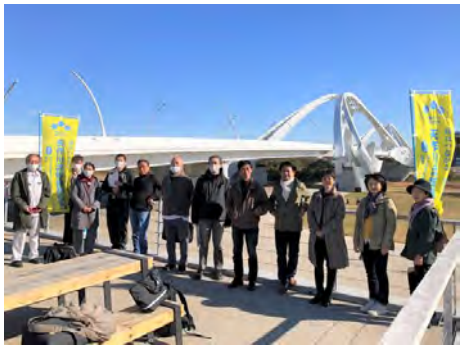


写真　FW の実施状況（左：山地酪農実験地（根羽村）、中：C･D 材の利用方法（恵那市）、右：矢作川水辺プロジェクト整備地（豊田市））

（2012.5.19 修正版）

出発点「矢作川の恵みで生きる」の共有

検討の進め方

山村をとりまく社会背景の変遷と望ましい将来像

STEP1

過去と現在を
知　る

理解と情報共有を促進する

右に記載した事項について、具体的に「知る」機会を設け、情報共有を図る
→ 市民企画会議
→ 勉強会で対応

実現に向けた課題と解決手法

STEP2

未来像実現に向けた課題と解決手法を
考える

情報共有を踏まえ、まず「人の問題」をテーマに解決手法を検討
→ 市民会議
→ 地域部会で対応

STEP3

できることから活動を
実践する

	人と山村	森　林
高度経済成長期から後へ	●自給的経済、自立、自治、誇りがあった。 ●百業をやっていた。	●薪炭林施業が行われていた。 ●最上流域や額田地区ではスギ、ヒノキ人工林施業が行われていた。 ●藤岡・小原・旧豊田・岡崎にはハゲ山も多かった。
	●若者が中下流の都市へ流出した。 ●拡大造林によって広大な人工林が形成され、長期間管理し続ける必要があったが、その担い手がいなくなった。	●もともと林業地だったところでも、そうでないところでも、もうかるというもくろみと国策により、拡大造林（広葉樹からヒノキ、スギへ転換）を推進した。 ●国産材を流通させる仕組みが輸入木材に比べて整わず、国産材の価格が低下し、林業が業として成り立たなくなった。
現代	●山村における若者の就業機会が乏しい。就業できても定着できない。 ●現代では、山村は過疎化、少子化、高齢化、核家族化が進行している。	●もともと林業地でなかった地域では、多くの所有者が素人山主で林業を知らない。 ●管理が行き届かないため過密化した水消費型森林や放置人工林からの土砂流出・崩壊の危険性が増加している。
近未来（後でおくとどうなるか）	●限界集落、消滅する集落が増えていく。残された集落でも山村単独での自治や経済的な自立が困難となり、コミュニテイが崩壊する。 ●国、県、市町村ごと、部局ごとに目指す森林の姿がバラバラで、流域圏一体となった森林管理が行われていない。	●林業は利益を確保せざるを得ないことから、森林皆伐後の再造林の放棄が起こり、森林の水土保全機能が喪失する。 ●不適切な林道・作業道・搬出路が作られ、放置され、土砂が流出し、崩壊の危険性が高まる。
望ましい未来像	●流域圏にとって望ましい山村のあり方は、収入は多くなくても安定した若者の仕事があり、山村の資源を持続可能なやり方で利用しつつ、経済的に自立すること。 ●自然の恵みを利用できる知恵のある人が定住していること。	●流域圏にとって望ましい森林は、自然の力で持続する生態系と人による持続的な維持管理下に置かれる生態系が最適に配置され、多様な生物が生息し、木材や水などの恵みを中下流にもたらしてくれる森林。 ●木材生産を主目的として管理する森林と、水土保全機能の発揮を主目的として管理する森林を区分し、木材生産に適さない人工林を天然林に戻していく。

実現のための課題と解決手法

森林の適切な管理は、まず山村の再生（担い手作り）から！

当面の課題1　誰がやるか（人と地域の問題）

課題
●現金収入、仕事、医療、教育など、出発点に到達する以前の問題が山積。

解決手法（例）
●既に自発的に始まっている優れた取組を集めた「山村再生担い手づくり事例集」の策定やＩターンした若者のミーティングを通じ、山村再生の担い手作りを支援する具体的な方策を検討する。
●上下流をビジネスサイクルでつなぐ産業振興（流域フェアトレード）の推進（中下流都市中心部での上流生産物販売拠点の設置など）

役割分担
市民・学識経験者・行政が、対等な立場で、一体となって推進していく。

山村再生のために先ず"人づくり"が必要そのうえで"森づくり"にも取り組む必要がある。

担い手づくり事例集イメージ
- 山村再生担い手づくり事例集
  - 成功事例1
  - 成功事例2
  - 失敗事例1
  - ……

当面の課題2　何をやるか（森の問題）

課題
●流域圏として統一性のある森林管理を行い、矢作川の森の恵みが中下流や海までいきとどくためのガイドラインが必要。
●データ不足・研究の遅れによって、「植林こそが正しい」といった誤解を正すことが必要。

解決手法（例）
●「矢作川流域圏の森づくり・木づかいガイドライン」の策定
●モデル林の設定とモニタリング
→ガイドラインの検証のため、土砂を流す森、節水型森林の手本を作る。

行政・学識経験者・市民が対等な立場で、一体となって策定

役割分担
市民・学識経験者・行政が、対等な立場で、一体となってガイドラインを策定し、モデル林を設計、施業、研究し、モニタリングを行っていく。

3. 各テーマの活動進捗報告

3.1　流域圏担い手づくり事例集

(1) 今年度の活動目標に対する進捗状況

【今年度の活動目標】

○持続可能な地域づくりにつながる活動を行っている団体に取材を行い、「流域圏担い手づくり事例集Ⅲ」を刊行する。
○川部会、海部会を巻き込んだ流域全体の担い手を発掘する活動とする。
○これまでの事例集づくりで得られた情報と、取材先団体のカテゴリーや団体間の関係を整理し、現段階での事例集づくりの成果をまとめ、流域圏懇談会 10 年誌に掲載する。
○事例集の活用方法と、今後の事例集づくりの方向性について検討する。

(2) 今年度の活動成果

1) 「矢作川流域圏懇談会　10 年誌」の作成

・今年度の 8 月に、矢作川流域圏懇談会は設立 10 周年を迎えた。それを機に、「矢作川流域圏懇談会 10 年誌」を作成し、その中でこれまでの事例集づくりの成果をふりかえり、矢作川流域を支えてきた人びとの動きと今後の展望についてまとめた。

○10 年誌作成のための編集委員会を実施した。
○昨年度実施したキーパーソンヒアリングの結果を整理し、掲載した。
○事例集をふりかえり、懇談会の未来を語る座談会を令和 2 年 7 月 22 日に実施した。
○取材した 102 団体の年表を作成し、活動の傾向を整理して、今後の事例集づくりの方向性を見出した。

2) 川部会、海部会を巻き込んだ活動

・豊田市で開催された「耕 LifeSDG's マルシェ」の中で「矢作川感謝祭」が実施された。岡森フォレスターズの演奏、矢作川カッパクイズのほか「山、川、里、海のトークセッション」にコーディネーターおよび登壇者として懇談会メンバーが参加し、川と流域に対する想い、みんなが生き生きと暮らせる持続可能な流域づくりについて語り合った。
・ゆく川・くる川　川談義において、本懇談会の紹介と 10 年の実績を全国に向けて発信した。

写真　山、川、里、海のトークセッション

写真　ゆく川・くる川における懇談会の発信

3) 事例集の活用方法と事例集づくりの方向性についての検討

・10 年誌の中で活動実績をカテゴリー別に再整理し、懇談会関係者以外の閲覧を考慮した分かりやすいものとした。
・グリーンインフラ・ネットワーク・ジャパン 2020 に参加し、本懇談会の紹介、流域圏担い手づくり事例集の活動成果についてしたポスター発表を行った。

A-010
資料1

矢作川流域圏の担い手づくり事例集
―持続可能な流域づくりを支える人びと―

・・・ Collection of practice to support sustainable Yahagi River watershed ・・・

洲崎燈子*、近藤朗、高橋伸夫、浜口美穂、中田慎、石原淳（矢作川流域圏懇談会）

要旨

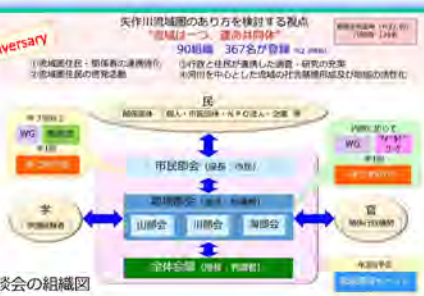
国土交通省豊橋河川事務所は2010年に、流域圏全体の発展をめざし「矢作川流域圏懇談会」を立ち上げた。山・川・海の3つの地域部会のうち山部会は、中山間地振興や川や海の環境保全に関わる活動を行う団体に取材を行い、計6冊の「山村再生担い手づくり事例集」と「流域圏担い手づくり事例集」を発行した。取材対象となった団体の活動は多種多様で、大きな経済的利益は生まなくても、地域の自然資源を活かし、流域内でお金、人材、物がまわる流域内フェアトレードの形成を通じ、持続可能な流域づくりに貢献していると考えられた。

矢作川流域圏懇談会について

長野、岐阜、愛知の3県を流れる矢作川には、矢作川沿岸水質保全対策協議会の活動に代表されるように、“流域は一つ、運命共同体”という共通認識のもとでさまざまな課題に取り組んできた歴史がある。

2009（平成21）年7月に河川法に基づいて「矢作川水系河川整備計画」が策定され、その中で治水、利水、環境、総合土砂管理、維持管理などの課題に対し、民・学・官の連携・協働による取組が必要であることが明記された。これを受けて国土交通省豊橋河川事務所は2010（平成22）年8月、流域住民・関係機関も含めた話し合いを通じて連携・協働の取組を行うことで、流域圏全体の発展につなげることをめざす「矢作川流域圏懇談会」を立ち上げた。

同懇談会は市民部会、地域部会（山・川・海）で構成され、各部会で学識者・行政・関係団体・市民団体などのメンバーが連携して地域の課題を抽出し、その解決方法を探っている。また部会間の連携によって、持続可能な流域圏のあり方を模索している。



矢作川流域圏懇談会の組織図

「担い手づくり事例集」とは？

6冊の担い手づくり事例集

山部会は、流域の山の問題を「人と山村の問題」と「森林の問題」に分けて整理した。水源の森づくりを担う山村で過疎化と少子高齢化が進んでいるのが「人と山村の問題」である。解決の糸口として、懇談会メンバーが矢作川流域で主として中山間地振興に携わる団体（一部川や海の活動団体も含む）に取材を行い、2013（平成25）年度から4年間かけ、流域内の多様な主体によるネットワークづくりを支援する「山村再生担い手づくり事例集」を4冊発行した。

2017年からは、取材先として川や海の環境保全や水辺空間の再生・利活用に携わる団体を増やし、タイトルを「流域圏担い手づくり事例集」と改めて2冊発行した。この事例集の発行により流域内のネットワークが更に広がり、流域内でお金、人材、物がまわる流域内フェアトレードと、食・エネルギー・水・医療・教育・安心安全の自治が進むことをめざしている。

◆事例集のミッション
① 現場に行って、直接、現場の人たちの苦悩や喜びや課題に触れる
　→　生の声を引き出す！
② その生の声をみんなで共有しよう！
　→　報告集に取りまとめ、矢作川流域圏懇談会のホームページにアップ
③ 課題をあぶり出す　→　集い、知恵の交換をする

この取材の基本方針は「インターネットで拾える情報ではなく、現場に出向いてじっくり話を聞き、その成果を記録すること」「取材先の自慢話だけではなく悩んでいる部分、いわば“光と影”を記録すること」「話を聞く過程を大事にすること」といったことである。このような取材は、「いい取材者は良質なセラピストである」というある取材者の言葉が示すように、取材者だけでなく取材される側にも気付きをもたらす。

物書きのプロではない取材者たちは取材先とやりとりを重ね、編集会議でお互いのレポートについて意見を出し合い、懸命に最終稿をまとめた。その結果6年間で、思いのこもった102篇の取材記録がまとまった。

事例集づくりから見えてきたこと

取材を通じて大変多くの発見があった。たとえば高齢者が独創的かつパワフルな活動を展開している長野県根羽村、地域愛に裏付けられた活動が浸透している岐阜県恵那市、多数の若者がIターンし、町場の住民との交流も含め、きわめて多数の多様な活動が生まれている愛知県豊田市、長い林業の歴史に支えられている愛知県岡崎市といった地域特性である。

また、取材先団体の多くが農林業に携わっていたが、Iターン者やUターン者、そうした移住者と地域住民の仲立ちを行うリーダー、中山間地で活動する都市住民など、新しい価値観で地域を再評価できる人物が中心となっている団体が多いことが特徴的だった。多くの団体が居住地や活動地の自然（生物や空間）とその活用法について創意工夫をこらし、地域住民のニーズに見合った、またはニーズを掘り起こす活動をしていた。活動内容は多種多様で、大きな経済的利益は生まなくても、地域の自然資源を活かし、流域内でお金、人材、物がまわる流域内フェアトレードの形成を通じ、持続可能な流域づくりに貢献していると考えられた。そうした活動の例を以下に示す。

すべてのレポートから、地に足の付いた、身近な人々とつながる暮らしの中で得られる幸せを感じ取ることができた。取材された人々の活動は、きっとどこの流域でも応用することが可能な、たくさんの示唆にあふれていた。

◆耕作放棄地の耕作再開

里山再生と人材交流をめざし各種講座を運営。市民農園を作ったことで地域の耕作放棄地が8割→3割に減少
（新盛里山耕流塾）

休耕田畑で桑の木を育て、桑の葉茶を生産し、歴史的文化を伝えながら桑、蚕、繭を多面的に活用
（NPO法人マルベリークラブ中部）
＊写真は公式サイトより

◆放置人工林の手入れと木材の活用

放置人工林の間伐材の出材者に対して地域通貨を提供。出された材はチップになるほか、ユーザーまで宅配される薪材や、名古屋の「都市の木質化プロジェクト」の資材となる
（旭木の駅プロジェクト×あさひ薪研×錦二丁目まちづくり協議会）

◆河川敷の利活用

河畔に広がり、川への見通しを遮断していた密生竹林を伐採して広葉樹林を育成し、都市住民の憩いの場となる空間を創出・維持
（NPO法人矢作川森林塾）

矢作川の河川敷で1年に1回開催される全て手作りの音楽祭。昔から文化の生まれる場であった川で、普段の生活とは違う「実験」として開催している
（橋の下世界音楽祭実行委員会）

図　グリーンインフラ・ネットワーク・ジャパン 2020 にて発表したポスター

3.2　山村ミーティング

(1) 今年度の活動目標に対する進捗状況

【今年度の活動目標】

○矢作川流域林業担い手 100 人ヒアリングの結果をふまえ、林業技術者と市民の協働による「流域の森づくりガイドライン」を策定する（森づくりガイドラインとの共同作業を想定する）。

○ガイドラインの作成においては、林業技術者に直接意見をうかがうなど、懇談会との連携を強化する（担い手の創出）。

○矢作川感謝祭への森林組合員の参加が定着してきたため、このイベントをどのように活用するか、さらに検討を行っていく。

(2) 今年度の活動成果

1) 矢作川流域林業担い手100人ヒアリング結果をふまえた「流域の森づくりガイドライン」

・今年度は、他のテーマ、とりわけ「森づくりガイドライン」とのつながりを重視し、林業の担い手が集まるミーティングを実施しながら、現場の生の声を聞き、ガイドラインづくりに参画できる体制を模索している。

2) 林業技術者と矢作川流域圏懇談会との連携強化

・WG では、岡崎市、根羽村、恵那市、豊田市を訪れ、各地域の林業に携わる方からお話をいただき、懇談会との連携や今後の展開などについて意見交換を行った。

・森づくりガイドラインと共同で、「研究者、市民ボランティア、山林現場技能者によるガイドラインづくり」と「森づくりの健康診断」を進めていく計画を立て、地球環境基金に計画書を提出した。

3) 流域で開催されるイベントへの参加

・今年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、当初予定していた「矢作川感謝祭」「三河湾大感謝祭」などが中止となった。しかし、その代わりとして、豊田市で開催された「耕 LifeSDG's マルシェ」の中で「矢作川感謝祭」が実施された。岡森フォレスターズの演奏、矢作川カッパクイズのほか「山、川、里、海のトークセッション」にコーディネーターおよび登壇者として懇談会メンバーが参加し、川と流域に対する想い、みんなが生き生きと暮らせる持続可能な流域づくりについて語った。

写真　林業関係者による現地説明（恵那）

写真　「矢作川感謝祭」で演奏する岡森フォレスターズ

3.3　森づくりガイドライン

(1) 今年度の活動目標に対する進捗状況

【今年度の活動目標】

○矢作川流域の森を守っているプロたちが、その仕事の意味や重要性を理解し、誇りをもって作業を行うための指針となり、同時に、矢作川流域の恵みで生きる河川管理者、沿岸漁業者、流域住民が、流域の森を守っているプロたちの作業の公益的な重要性を理解し、彼らをリスペクトし、応援するための指針となることを目的とした「森づくりガイドライン」づくりに取り組む。(②山村ミーティングとの共同作業を想定する)

○森林経営管理法、森林環境譲与税などの国の新たな動きを踏まえつつ、流域市町村の森林施策の着実な進行を後方支援し、流域圏全体として調和のとれた森づくりを目指す。

○水循環基本法に定められた森林の雨水浸透能力又は水源涵養能力の整備について、矢作川流域における関係省庁や地方自治体の施策をフォローアップする。

(2) 今年度の活動成果

1)「森づくりガイドライン」づくりをめざして

・「矢作川流域の森づくりガイドライン」の策定を進めていくため、ガイドライン策定作業への林業技術者の協力をお願いする文書案、ガイドライン策定会議の企画案について検討を行った。

・山村ミーティングと共同で、「研究者、市民ボランティア、山林現場技能者によるガイドラインづくり」と「森づくりの健康診断」を進めていく計画を立て、地球環境基金に計画書を提出した。

2) 流域圏全体として調和のとれた森づくり

・岡崎市、恵那市において、森林環境譲与税の使い道に関する取り組みを県や市の担当者より報告いただき、意見交換を行った。

・特に、恵那市では、フィールドワークとして奥矢作森林塾を訪れ、森林資源管理、森林環境譲与税、地域循環利用などについて説明を聞き、今後の展開などについて意見交換を行った。

3) 矢作川流域における森林の雨水浸透能力又は水源涵養能力の整備について

・岡崎市が乙川で実施している間伐の推進による緑のダム機能向上について、モデル林の選定や実験施設の設置を通して、モニタリング調査を継続的に実施する方針であることが情報共有された。

・次年度開催されるバスツアーで水源涵養モニタリングサイトを見学する予定であるため、関係者で下見を行うとともに、説明事項に関する打合せを行った。

写真　林政の進捗報告（岡崎市森林課）

写真　森林環境譲与税の活用報告（恵那市林政課）

3.4　木づかいガイドライン

(1) 今年度の活動目標に対する進捗状況

【今年度の活動目標】

○矢作川流域内の各関係者が取り組まれている木づかい活動や推進テーマを「さあ～しよう」の形で提案していただくことにより情報を共有化し、流域内の身近な木を利用した木づかいが推進されるように「木づかいガイドライン」を作成する。

○矢作川の流れを絆として、個人の思い入れを込めて流域が一体となることの大切さを伝えるアイテム「矢作川流域ものさし・私の流域物語」を有志で製作し、これを全国の各流域に配布することによって全国の各流域においてその理念と製作方法を普及する。

○「矢作川流域ものさし・私の流域物語」の理念とは、「流域はひとつ運命共同体」・「水を使うものは自ら水をつくるべし」といった全国にも通用する矢作川の流域思想であり、こうした思想と共にある矢作川流域圏懇談会の取り組みについて全国の流域関係者に向けて発信する。

○「私の流域物語」に記載された物語に関わる場所での「木づかいライブ・スギダラキャラバン(木育キャラバン)」の実施や、個人の思い入れを尊重した木づかいによる市民創造型・労働参加型・課題解決型プロジェクトを実施する。

○こうした取り組みを通して矢作川の流域材を活用した楽しい「木のある暮らし」を定着させ「木づかいによる場所の力づくり＝プレイスメイキング」によって身近な生活空間を魅力的な地域空間に変革していく。

○こうしたプレイスメイキングに際し、地域住民や地域の子どもたちが一緒になって活動することにより、特に子供たちに対して、地域資源と共に生きていく様々な原体験の場を提供していく。

(2) 今年度の活動成果

1) 「木づかいガイドライン」の作成

・木づかいの推進については、根羽村森林組合が中心となって「木づかいライブ・スギダラキャラバン」を進めている。今年度は、新型コロナウイルス拡大防止のため、多くのイベントが中止になったが、3 月には岐阜女子大学の学生による木材を使った家具製作実習を行った。また、愛知教育大学とも木育関係での取り組みを行った。

写真　岐阜女子大学　住居学専攻の事例

森林組合に学ぶ家具製作実習
伐採現場のある村の製材工場でオリジナル設計の家具を創造できる意義は大きい。

2)「矢作川流域ものさし・私の流域物語」を製作、その理念と製作方法を普及

・10 年誌の中で、私の流域物語の意義や方法を示した。特に、流域を魅力的にするのは、流域に住む人の気持ちの総熱量であり、地域の持っている自然の特性が、個人の熱量を生み出し、それら個人の熱量が結びつくことで、地域を魅力的に変えていく力に変わる。

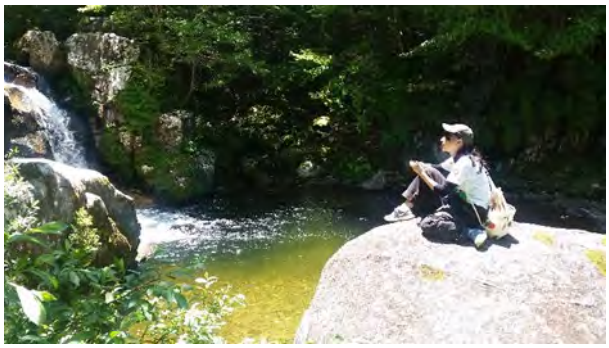


写真　根羽村つたの滝　大いなる明日への飛翔

（ずっといたくなる癒しの空間　水源の滝つぼは、心に安らぎを与え、また、気持ちの熱量も高めることができる。）

3)「木づかいライブスギダラギャラバン（木育キャラバン）」、木づかいによる市民創造型・労働参加型・課題解決型プロジェクトの実施

・市民創造型の取り組みとして、名古屋市ほしざき保育園の伐採された園内のケヤキを利用したベンチ製作の事例を挙げた。保育園の改修のため伐採されたケヤキはずっと子供たちの成長を見守り続けてきた。今度は、ベンチに生まれ変わって、子度たちの毎日に寄り添うことになった。

写真　ほしざき保育園の伐採されたケヤキを活用した事例

4) 楽しい「木のある暮らし」を定着

・今年度取り組みを行った「子供のための今すぐはじめる森と木のある暮らし事業」について、報告を行った。

本事業は、普段の生活の中で「森や木のある暮らし」が実践できるように、森林整備や木を活用する体験プログラムを造成することを目的とする事業である。今回のＷＧでは、実際にプログラムで使われているウッドデッキや端材で作った椅子などを見ながら、プログラム内容などについて話し合いを行った。

写真　製材工場の端材で製作した長椅子

5) 地域住民や子どもたちに対して、様々な原体験の場を提供

・南信州及び矢作川流域の小中学生を対象に、普段の生活の中で「森や木のある暮らし」が実践できるように、森林整備や木を活用する体験プログラムが計画・実施できる事業が紹介された。

・実際のプログラムの中で使用されるウッドデッキや椅子などを参加者で確認した。

写真　根羽学園の小学生によるデッキの仮組み

写真　山の中の森林空間利用　ウッドデッキ設置によるプレイスメイキング

・小学生と中学生が一緒になってウッドデッキを製作した。小学生はデッキの仮組みを、中学生はデッキ材料をロープワークで山の上に上げてデッキを製作・設置した。急峻な尾根の上でもロープワークによって素敵なウッドデッキのある空間ができた。このデッキの上で、お弁当を広げたり、森寝、森ヨガを行ったり、レールランの基地や、ボルダリングデッキとしても活用する。

写真　山の中の森林空間利用　ウッドデッキ設置によるプレイスメイキング

4. 次年度の活動目標について

課題	活動テーマ	次年度の活動目標
①人と地域の問題	流域圏担い手づくり事例集	○持続可能な地域づくりにつながる活動を行っている団体に取材を行い、「流域圏担い手づくり事例集Ⅲ」を刊行する。 ○特に山、川、海のエリアと都市をつなぐ活動に着目して取材を行う。 ○川部会、海部会を巻き込んだ流域全体の担い手を発掘する活動とする。 ○事例集の活用方法と、今後の事例集づくりの方向性について検討する。
	山村ミーティング	○ガイドラインの作成においては、林業技術者に直接意見をうかがうなど、懇談会との連携を強化する（担い手の創出）。 ○矢作川感謝祭への森林組合員の参加が定着してきたため、このイベントをどのように活用するか、さらに検討を行っていく。 ○矢作川流域の森を守っているプロたちが、その仕事の意味や重要性を理解し、誇りをもって作業を行うための指針となり、同時に、矢作川流域の恵みで生きる河川管理者、沿岸漁業者、流域住民が、流域の森を守っているプロたちの作業の公益的な重要性を理解し、彼らをリスペクトし、応援するための指針となることを目的とした「流域の森づくりガイドライン」づくりに取り組む。（山村ミーティングと森づくりガイドラインの協働） ○森林経営管理法、森林環境譲与税などの国の新たな動きを踏まえつつ、流域市町村の森林施策の着実な進行を後方支援し、流域圏全体として調和のとれた森づくりを目指す。 ○水循環基本法に定められた森林の雨水浸透能力又は水源涵養能力の整備について、矢作川流域における関係省庁や地方自治体の施策をフォローアップする。
②森の問題	森づくりガイドライン	
	木づかいガイドライン	○矢作川流域内の各関係者が取り組まれている木づかい活動や推進テーマを「さあ～しよう」の形で提案していただくことにより情報を共有化し、流域内の身近な木を利用した木づかいが推進されるように「木づかいガイドライン」を作成する。 ○矢作川の流れを絆として、個人の思い入れを込めて流域が一体となることの大切さを伝えるアイテム「矢作川流域ものさし・私の流域物語」を有志で製作し、これを全国の各流域に配布することによって全国の各流域においてその理念と製作方法を普及する。 ○「矢作川流域ものさし・私の流域物語」の理念とは、「流域はひとつ運命共同体」・「水を使うものは自ら水をつくるべし」といった全国にも通用する矢作川の流域思想であり、こうした思想と共にある矢作川流域圏懇談会の取り組みについて全国の流域関係者に向けて発信する。 ○「私の流域物語」に記載された物語に関わる場所での「木づかいライブ・スギダラキャラバン(木育キャラバン)」の実施や、個人の思い入れを尊重した木づかいによる市民創造型・労働参加型・課題解決型プロジェクトを実施する。 ○こうした取り組みを通して矢作川の流域材を活用した楽しい「木のある暮らし」を定着させ「木づかいによる場所の力づくり＝プレイスメイキング」によって身近な生活空間を魅力的な地域空間に変革していく。 ○こうしたプレイスメイキングに際し、地域住民や地域の子どもたちが一緒になって活動することにより、特に子供たちに対して、地域資源と共に生きていく様々な原体験の場を提供していく。